

Factors associated with post-stroke social participation : A quantitative study based on the ICF framework

脳卒中後の社会参加に関する要因：ICF 枠組みに基づく定量的研究

Della Vecchia et al.
Annals of Physical and Rehabilitation Medicine
Volume 66, Issue 3, April 2023, 101686

背景

- ・脳卒中後の回復に関する多くの研究では、BI や Rankin Scale などの機能的アウトカム指標が使用されている。それらの尺度は、日常生活における脳卒中の影響を評価しておらず、個人の特性（社会人口学的要因や心理的特性）と生活環境との相互作用を考慮していない。
- ・ICFにおいて、参加制限の概念は「生活場面への関わりにおいて個人が経験する可能性のある問題」と定義されており、研究におけるアウトカムとして注目されている。参加は、各々の要素が組み合わさった結果であると考えられており、個人・環境因子は社会参加を促進または制限する可能性がある。
- ・特に心理的要因と心理社会的要因の重要性が指摘されているが、動機付けや受容といった特定の対処戦略については包括的な研究が不足している。また、参加の向上の重要性が高まっているにもかかわらず、ICF カテゴリーの因子をモデルに組み込んだ研究はほとんど存在しない。

目的

ICF の枠組みの異なるカテゴリーに従って、脳卒中後の参加に関する要因を調査すること。

方法

研究デザイン：相関横断的研究

対象：STROKE69 の研究の後、脳画像診断（CT または MRI）で確定的な脳卒中診断を受けた者。
かつ調査時に施設入所していなかった参加者（地域在住者）。

目的変数：

The Stroke Impact Scale (SIS) 2.0 のフランス版、「社会参加」の領域

説明変数：

〔臨床変数〕 入院時の国立衛生研究所脳卒中スコア (NIHSS),

STROKE69 研究内からの脳卒中の種類（虚血性または出血性）、脳卒中発症から調査完了までの時間、脳卒中の後遺症に関する認識についての質問、ADL/IADL の困難度 (SIS 2.0 の「ADL/IADL」領域)

〔個人因子〕 Brief-COPC

経験した問題への対処指向（社会的支援を求める、問題解決、回避、前向きな思考）を調査する質問紙

〔環境因子〕 the World Health Organization Quality of Life-BREF (WHOQOL-BREF)

HRQOL のさまざまな領域、特に生活環境領域と社会関係領域を評価する

統計解析：

主要アウトカム: SIS の「社会参加」スコア

二変量解析 ($p < 0.2$) で変数を選択。欠損値は多変量代入 (MICE) で処理。

ステップワイズ線形回帰分析を用いて、社会参加に影響を与える要因を特定する。

多変量モデルでの有意水準は $p < 0.05$.

結果

1. Table1 :

男性 63%, 女性 37%, 平均年齢は 68.7 歳, 既婚者は 67%, 63% は退職者であった
最も多く用いられた対処戦略はポジティブ思考であった。

参加者のほとんどは虚血性脳卒中（軽度）を経験、発症からの平均期間は 14.7 ヶ月であった。
後遺症はほとんどの参加者が報告し、疲労が 71%, 次いで認知障害が 58% を占めた (Fig.2).

SISにおいて、ADL/IADL ドメインスコアの平均は 81.6 (0-100 点) であり、活動制限の程度は比較的低い集団であった。

社会関係に対する満足度の平均は 62.5, 生活環境に対する満足度の平均は 69.5 であった。
社会参加スコアの平均値は 66.5 であった (0-100 点).

2. Table2 :

脳卒中の種類と発症からの時間を除くすべての変数が参加スコアと関連を示した。

3. Table3 :

多変量解析 (Table 3) の結果、社会参加と独立して有意な正の関連を示したのは、①ポジティブ思考対処戦略の使用、②生活環境に対する高い満足度、③活動制限の少なさであった。一方、負の関連を示したのは、①社会的支援を求める対処戦略の使用、②脳卒中関連後遺症の数の増加であった。

結論

- ・ 対処スタイルとしてのポジティブ思考、生活環境に対する高い満足度、および活動制限の少なさは、脳卒中後の社会参加と正の相関関係にあった。
- ・ 一方、社会的支援を求める対処スタイルと脳卒中関連後遺症の発症率の高さは、社会参加と負の相関関係にあった。
- ・ 本研究では、退院後および回復過程全体を通して社会参加を向上させるために、リハビリテーション過程において考慮すべき具体的な課題、すなわち対処スタイルと生活環境の重要性が明らかになった。